

一世界一佛と多世界多佛

岩井昌悟

0. はじめに

一般的に、小乗佛教は「一世界一佛」を説き、大乘佛教は「十方諸佛」を説くと言われる。「十方諸佛」はあたかも大乘佛教の標語のように扱われる。しかしながらこの二つの説は互いに異なることを説いているのであろうか。すでにニカーヤ・阿含において説かれていた「一世界一佛」は、字義どおりに考えれば、同時に「多世界多佛」を含意しているようにも解される。また大乘佛教が説く「十方諸佛」も、原則的に「多世界多佛」であって、「一世界多佛」ではない。⁽¹⁾ 南方上座部と説一切有部の見解が、實は「多世界一佛」になっているために、大乘の説く十方諸佛が強調されてきたのである。部派佛教においても大衆部のように多世界多佛を明確に打ち出した部派もある。

上記のことについては、すでに先學の指摘が数多くなされてきたし、特に新資料が出現したわけでもない。それにもかかわらず、あえてこの問題に取り組もうと思った理由は、南方上座部と説一切有部が多世界一佛を主張するその意圖と論法が、筆者にはいまひとつ理解できず、疑問があったからである。またそれぞれの部派の主張は、主に論書の中で示

-
- (1) 例えば『攝大乘論』(T31, p.132a)「於一界中無二故 同時因成不可量 次第成佛非理故 一時多佛此義成」として、「一世界に二佛なし」を前提とした議論が展開される(長尾雅人『攝大乘論一和譯と注解(下)』講談社, 1987年, p.435参照)。また、『無量壽經』(T12, p.268b)の第22願(梵文では第21偈)で、他方國土から來生する菩薩衆が一生補處にとどまらねばならないのは、恐らく阿彌陀佛がいるかぎり極樂では成佛できないためであろう。他の世界に生まれ變わって成佛することになると思われる(中村元他『淨土三部經(上)』岩波文庫, 1963年, pp.39, 158参照)。
- (2) 藤田宏達「阿含における多佛思想の一斷面—現在他方佛との關係」『印度學佛教學研究』第12號, 1958年, pp.64-73; 勝本華蓮『座標軸としての佛教學—パーリ學僧と探す「わたしの佛教」』佼成出版, 2009年, p.82など。

されているのであるが、たとえば説一切有部の論書において「大衆部はこのように説く」と記されていても、それが実際に大衆部の伝える文献でどうなっているのか、確認したいという動機もあった。

本論は、一佛か多佛かの議論の展開を追うために、ニカーヤ・阿舎の記述から始めて、資料を整理して提示し、特に南方上座部と説一切有部の兩部派が「多世界一佛」を主張するその意圖と論法を明らかにしようとするものである。これは先學の研究の検証作業にもなるであろう。

1. 一世界一佛を説く定型句

1-0 一つの世界 (lokadhātu) に二佛は生じないとする「一世界一佛」の原則は、パーリ聖典においては定型句によって處々に説かれていゝる。一例として *Āṅguttaranikāya* (以下 *AN.*) 1-15-1~28 (vol.I, p.028) に説かれるものを以下に紹介する。ここでは轉輪王についても同じことが言われている。⁽³⁾

1-0-1 *aṭṭhānam etaṃ …… anavakāso yaṃ ekissā lokadhātuyā dve arahanto sammāsambuddhā aṇubbaṃ acarimaṃ uppajjeyyūṃ. n' etaṃ thānaṃ vijjati.*

thānañ ca kho etaṃ …… vijjati yaṃ ekissā lokadhātuyā eko va arahamaṃ sammāsambuddho uppajjeyya. thānaṃ etaṃ vijjati ti.

これは理にかなわず、その餘地がない。一世界において二人の阿羅漢=正等覺者が先でも後でもなく〔同時に〕生じること、この道理はない。

これは理にかなない、その餘地がある。一世界において一人の阿羅漢=正等覺者が生じること、これは理に適う。

1-0-2 *aṭṭhānam etaṃ …… anavakāso yaṃ ekissā lokadhātuyā dve rājāno cakkavattī aṇubbaṃ acarimaṃ uppajjeyyūṃ. nE etaṃ thānaṃ vijjati.*

thānañ ca kho etaṃ …… vijjati yaṃ ekissā lokadhātuyā eko rājā cakkavattī uppajjeyya. thānaṃ etaṃ vijjati ti.

(3) 以下パーリ語テキストは *Chatṭha Saṅgāyana Tipiṭaka 4.0* (CST 4.0; Text copyright © 1995 Vipassana Research Institute) にもとづく。但し示した巻・頁は PTS のテキストのものである。

これは理にかなわず、その餘地がない。一世界に二人の轉輪王が先でも後でもなく〔同時に〕生じること、この道理はない。

これは理にかなない、その餘地がある。一世界に一人の轉輪王が生じること、これは理にかなう。

ではこの定型句は聖典中、如何なる文脈で現れるであろうか。以下に分類して資料を紹介する。その際にサンスクリット語の資料や漢譯資料においてこの定型句がどのような形で表れているかにも留意する。

1 - 1 - 0 *Dīghanikāya* (以下 *DN.*) 19 ‘Mahāgovinda-s.’ (vol.II, p.225) では、三十三天の神々が集まっていた時に帝釋天が釋尊を褒め稱え、それを聞いた諸天が歡喜して、一人の神が「世界に4人の佛が現れれば世界にとってもっと利益があるであろう」と主張すると、他の神々が「いや3人で十分だ」、「いや2人で十分だ」と言い合う。それを聞いた帝釋天が、1 - 0 - 1 に挙げた定型句と同じ表現で一世界一佛の原則を説く。

以下にこれに對應する他の諸資料の所在と一世界一佛の原則を説く箇所を下線で示す。

1 - 1 - 1 *Mahāvastu* (vol.III. p.199)⁽⁴⁾ : asthānaṃ khalv etaṃ …… anavakāśaṃ yad ekakāle dvau tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā loke utpadyensuḥ dharmaṃ deśayensuḥ.

友よ、これは理にかなわず、その餘地がない。一時に（同時に）二人の阿羅漢 = 正等覺者が世に生じて教えを説くこと、この道理はない。

1 - 1 - 2 『長阿含經』(T1, p.31a) : 時釋提桓因、告忉利天言。我從佛聞、親從佛受、欲使一時二佛出世、無有是處。但使如來久存於世、多所慈愍、多所饒益、天人獲安、則大增益諸天、減損阿須倫衆。」

1 - 1 - 3 『增壹阿含經』(T2, p.706b) : 時釋提桓因、告諸天曰。且置七佛、乃至二佛、但使今日釋迦文佛久住世者、則多所饒益。

1 - 1 - 4 『大堅固婆羅門緣起經』(T1, p.208a-b) : 汝等當知。同一時中、無處容受二佛如來應供正等正覺、出現世間、宣說諸法。

1 - 1 - 5 『人仙經』(T1, p.215c) : 汝等當知、我從佛聞。無有二佛同出於世。何有四佛八佛同出世耶。汝等但願。我佛世尊無漏之體、壽

(4) 以下 *Mahāvastu* のテキストは *Mahāvastu*, ed. by É. Senart, Paris, 1882-97 を用いた。平岡聡『ブッダの大いなる物語（下）』大藏出版、2010年、p.320参照。

命増長、久住世間。

ここで留意されるべきは、1-1-1の *Mahāvastu* では「世に生じ教えを説くこと」の「世に」が 'loke' と loka の単数・處格で示されて、パーリの 'ekissā lokadhātuyā' と異なる点である。また1-1-3『増壹阿含經』には一世界一佛の原則がなぜか説かれていない。

1-2-0 *DN. 28 'Sampasādanīya-s.'* (vol.III, p.114) では、舍利弗が釋尊に以下のように語る中に一世界一佛が説かれる。

- (イ) 私(舍利弗)は、正覺(sambodhi)に關して世尊より、よりよく證知した(bhiyyo 'bhīññatārā sambodhiyaṃ)他の沙門・婆羅門が過去にいたか、現在にいるか、未來にいるかと問われたら、すべて「いいえ」(no)と答える。
- (ロ) 正覺に關して世尊と全く同等である(samasamā sambhodhiyaṃ)他の沙門・婆羅門が過去にいたか、現在にいるか、未來にいるかと問われたら、過去と未來については「そのとおり」(evaṃ)と答え、現在については「いいえ」(no)と答える。
- (ハ) その根據として、舍利弗は「過去・未來について正覺に關して世尊と全く同等の御方が過去に現れたし、未來に現れるであろう」ことを釋尊より直接に聞いたとし、現在については一世界一佛の原則(本論1-0-1の定型句)を釋尊より聞いたとする。そしてこれを釋尊が是とするという文脈である。

對應漢譯經典では一佛一世界の原則が以下の下線部のように示される。

1-2-1 『長阿含經』18「自歡喜經」(T1, p.79a): 舍利弗言。我當報彼。過去三耶三佛與如來等，未來三耶三佛與如來等。我躬從佛聞。欲使現在有三耶三佛與如來等者，無有是處。

1-2-2 『信佛功德經』(T1, p.255c): 爾時舍利弗白佛言。世尊。是義不然。我從佛聞，記念受持。無有二佛並出於世。

この文脈に説明を加えるならば、(イ)は佛の覺りは最高であるから、いつの時代のいずれの佛であっても「よりよく證知する」(bhiyyo 'bhīññatārā sambodhiyaṃ)ということはありませんという意味である。(ロ)で「そのとおり」(evaṃ)と答えるのは過去佛と未來佛の出現を認める言明であり、「いいえ」(no)と答えるのは「現在、他に佛はいない」ことを言ったものである。實は後述するように、この *DN.28* の記述が、

多世界一佛を説く部派によってその根據とされる箇所である。つまり釋尊によって是認される以上、舍利弗の言葉であってもこれは佛説であり、そこで「現在、他に佛はいない」と言われていることになる。しかもこの箇所⁽⁵⁾で舍利弗に向けられる設問とそれに對する答えは以下のようである。

DN.28 : kiṃ panāvuso sārīputta atth' etarahi aññe samaṇā vā brāhmaṇā vā bhagavatā samasamā sambodhiyan ti, evaṃ puṭṭho ahaṃ bhante no ti vadeyyaṃ.

(「舍利弗よ、正覺に關して世尊と全く同等である他の沙門・婆羅門が、現在にいるか」とこのように問われたら、「いいえ」(no) と答えるでしょう。)

『長阿含經』18：設問。現在沙門婆羅門，與佛等不。當答言，無。

上に見たように(ハ)の箇所⁽⁵⁾で「一世界一佛」が説かれているのではあるが、上の文言だけに着目すれば、ここには「一世界で」とか「一切世界で」とかいった範圍の限定がないため、多世界一佛を説く部派はこれを「現在〔一切世界において〕他の佛はいない」と解するようである。これについては後述する。

1 - 3 - 0 *Majjhimanikāya* (以下 *MN.*) 115 'Bahudhātuka-s.' (vol.III, p.64) では、どのようにして比丘は「處・非處智力を具える比丘」(ṭhānāṭṭhānakusalo bhikkhu) と呼ばれるかという阿難の問いに對して、釋尊が處(ṭhāna) と非處(aṭṭhāna) を列擧する中に、1 - 0 - 1 と 1 - 0 - 2 の定型句(ここでは轉輪王についても同様に説かれる)がある。

1 - 3 - 1 『中阿含經』181「多界經」(T1, pp.723c-724a)：尊者阿難白曰。世尊，如是比丘知因緣。云何比丘知是處・非處。世尊答曰。阿

(5) 『信佛功德經』(T1, p.255b) では質問と答えの關係が崩れている。

佛告舍利弗。汝今往問餘人。過去世中，可有沙門婆羅門而能了知真實通力等過佛者，乃至成佛菩提。汝當往問，彼作何答。

復次舍利弗。汝復往彼問於餘人。未來世中，可有沙門婆羅門，與佛等者，乃至成佛菩提。汝當往問，彼作何答。

復次舍利弗。汝可往彼復問於餘人。現在世中，可有沙門婆羅門，與佛等者，乃至成佛菩提。

復次舍利弗。又復往彼問於餘人。所有過去未來現在世中，沙門婆羅門等，歸依何人。汝當往問，彼作何答。爾時舍利弗白佛言。世尊。是義不然。……

難，若有比丘見處是處，知如眞。見非處是非處，知如眞。阿難。世中有二轉輪王並治者，終無是處。若世中有一轉輪王治者，必有是處。阿難。若世中有二如來者，終無是處。若世中有一如來者，必有是處。

1 - 3 - 2 『四品法門經』(T17, p0713b)：又復阿難。世間若有二佛出世，無有是處。一佛出世，斯有是處。又復世有二輪王出，亦無是處。一輪王出，斯有是處。

1 - 4 - 0 その他，獨覺と正等覺者も，同時に出現しないと説くものがある。⁽⁶⁾ちなみに獨覺は複數同時に出現できる。

1 - 4 - 1 『增壹阿含經』(T2, p.723b)：是時諸辟支佛，即於空中燒身，取般涅槃。所以然者。世無二佛之號，故取滅度耳。一商客中終無二導師，一國之中亦無二王，一佛境界無二尊號。

1 - 4 - 2 これに *Mahāvastu* (vol.I, p.357) の記事が對應する。獨覺がいると菩薩が兜率天から降りられないという考えが見られる。⁽⁷⁾

dvādaśehi varṣehi bodhisatvo tuṣṭitabhavanāto cyaviṣyati//
śuddhāvāsā devā jambudvīpe pratyekabuddhānām ārocayanti
bodhisatvo cyaviṣyati riṃcatha buddhakṣetraṃ//

「12年後に，菩薩は兜率天から死没します」——淨居天の神々はジャンプ洲において辟支佛たちに呼びかけた。「菩薩が死没します。佛國土を開放してください」。

tuṣṭitabhavanād atiyaśo cyaviṣyati anantaññānadarśāvī/
riṃcatha buddhakṣetraṃ varalakṣaṇaṇadharasya//

兜率天から甚だ名聲有る方にして無限の智見を有する方(=菩薩)が死没します。佛國土を，最上相を具える方に開放してください。

te śrutva buddhaśabdaṃ pratyekajinā maheśvaravarāṇāṃ/
nirvāṃsu muktacittā svayaṃbhuno cittavaśavartī//

心解脱して自存する彼ら辟支佛たちは，最上の大自在天(=淨居天)の語る「佛」という言葉を聞き，入滅した。

MN.116 'Isigili-s.' (vol.III, p.68) に上に對應する記事があるが，獨覺

(6) 勝本華蓮「諸佛と辟支佛—*Apadāna*を中心に」『印度哲學佛教學』(北海道印度哲學佛教學會)第16號，2001年，pp.89-103のpp.99の記述によれば南方上座部では説が一定していないらしい。

(7) 平岡聡『ブッダの大いなる物語(上)』大藏出版，2010年，p.253参照。

の名前を挙げるのみで、彼らが釋尊の降兜率以前に入滅したという記事はない。

2. 南方上座部の見解

2 - 0 パーリ七論の一つ、*Kathāvatthu* (p.608) の「一切方論」(sabbadisā kathā) によれば、南方上座部の正統見解が他方佛の存在を認めないものであることが分かる。

sabbā disā buddhā tiṭṭhantī ti? —āmantā.

一切方に諸佛がおられるのか。——然り。

puratthimāya disāya buddho tiṭṭhatī ti? —na h' evaṃ vattabb e…pe…

東方に佛(釋尊)がおられるのか。——そう言うてはならない(後略)。

puratthimāya disāya buddho tiṭṭhatī ti? —āmantā.

東方に佛(他佛)がおられるのか。——然り。

kinnāmo so bhagavā, kiṃjacco, kiṃgotto, kinnāmā tassa bhagavato mātāpitaro, kinnāmaṃ tassa bhagavato sāvakayugaṃ, konāmo tassa bhagavato upaṭṭhāko, kīdisaṃ cīvaraṃ dhāreti, kīdisaṃ pattāṃ dhāreti, katarasmiṃ gāme vā nigame vā nagare vā raṭṭhe vā janapade vā ti? —na h' evaṃ vattabbe…pe…

その世尊の名・生まれ・姓はなんというのか。その世尊の母父・二大弟子・侍者比丘はなんという名前か。どのような衣・鉢をもって、何處の村・町・都・國・地方に〔おられるのか〕。——そう言うてはならない。(後略)

(以下、南方、西方、北方、下方、上方、四大王天、三十三天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天、梵界について同様に繰り返す。)

Kathāvatthu-atthakathā (p.193) によれば、この一切方に諸佛がいるとの執見を有しているのは「たとえば大衆部」(yesaṃ laddhi, seyyathā pi mahāsaṅghikānaṃ) であるという。

ここで自論師に「他方に諸佛がいるならその名前などを示せ」と問わ

(8) 佐藤密雄『新訂増補論事附覺音註』山喜房佛書林, 1991年, p.866参照。

れて、他論師が答えに窮しているのが興味深い。後に見る *Mahāvastu* の記述はこれに答えているからである。

2-1 一世界一佛の理由・根拠を明確に説く聖典記事は見出されず、聖典に準ずる典籍になってようやく見られるようになる。*Milindapañho* (pp. 236-239) には、何故二佛が生じないのか、その根拠・理由が述べられている箇所がある。漢譯で傳わる『那先比丘經』とは對應しない箇所であるため、今はこれを南方上座部特有の見解として扱う。内容を要約して示せば以下のとおりである。

ミリンダ王が「もしも全ての如來が説くところが同一であるならば、ひとり出現しただけでもこの世に光明が生じるのだから、二人出現すればますます光明が生じるはずだ。教えるにも二人いた方が容易に教えることができる。それなのになぜ一人しか出現しないのか」と問う。この問いの背景にある思考方法は、すでに本論 1-1-0 に見られたものと同じである。

ナーガセーナ長老の答えは

- 1) この一萬世界は一人の如來にしか耐えられない。これには以下の(イ)～(ハ)の譬喩がある。
 - (イ) 一人乗りの船に同じ體格の者が二人乗り込むと沈むこと
 - (ロ) 飽食した人がさらに食事を詰め込むと死んでしまうこと
 - (ハ) 寶石を満載した二台の車の一方を空にして他方にその寶石を全部積み込むその車が壊れること
- 2) 「お前たちの佛」、「私たちの佛」と主張し合って二派を生じる。
- 3) 「佛陀は最高者である」といった聖典の言葉が⁽⁹⁾、誤りであることになる。大地、大海、須彌山、虚空、帝釋天、魔、大梵天がみな一人であることに喩えられる。

というものである。この論法は以下に見る註釈書（アッタカター）で、より發展した形で用いられる。

2-2 註釋書（アッタカター）では、處々に一世界一佛についての

(9) 中村元・早島鏡正譯『ミリンダ王の問い2』平凡社、1964年、pp.285-290参照。

(10) 原文では 'jettho buddho', 'settho buddho', 'visittho buddho', 'uttamo buddho', 'pavaro buddho', 'asamo buddho', 'asamasamo buddho', 'appaṭīmo buddho', 'appaṭībhāgo buddho', 'appaṭīpuggalo buddho' というものが挙げられている。

言及がある。内容的には大同小異であるので、もっとも詳細な記述とも
 言える、1 - 0 - 1 と 1 - 0 - 2 に紹介した記述に対する註釋部分
 (*Anguttaranikāya-aṭṭhakathā* (以下 AN-A.), II, pp.9-14) に代表させて、
 これを譯出する。注意すべきところで※を付してコメントをしながら
 進める。

2 - 2 - 1 *ekissā lokadhātuyā ti dasasahassilokadhātuyā. tīṇi hi
 khettāni jātikhettaṃ, āṇākhettaṃ visayakhettaṃ ti.*

「一世界において」とは、一萬世界において、である。3つの國土が
 ある。「生誕國土」と「威力國土」と「對境國土」とである。

※ここで「一世界において二人の阿羅漢 = 正等覺者が先でも後でもなく
 [同時に] 生じること、この道理はない」、または「一世界において一人
 の阿羅漢 = 正等覺者が生じること、これは理に適う」という時の「一世界」
 について註釋がされている。「一世界」は「一萬世界」のことであ
 るという。一萬世界は一萬の輪圍山世界 (= 一萬の須彌山世界) のこと
 であるが、これと三千大千世界との關係については、別稿を起こす予定
 である。

2 - 2 - 2 *tattha jātikhettaṃ nāma dasasahassī lokadhātu. sā hi
 tathāgatassa mātukucchismiṃ okkamanakāle nikkhamanakāle
 sambodhikāle dhammacakkappavattane āyusaGkhāravossajjane
 parinibbāne ca kampati.*

そこで、「生誕國土」とは一萬世界である。なぜならそれは、如來の
 入胎時と、出胎時と、成道時と、轉法輪時と、捨壽行時と、涅槃時とに
 震動するからである。

2 - 2 - 3 *koṭṭisatasahassacakkavāḷaṃ pana āṇākhettaṃ nāma.
 āṭ ānāṭ iyaparitta-moraparitta-dhajaggaparitta-ratanaparittādīnaṃ hi*

(1) これに類する記事として *Vibhaṅga-aṭṭhakathā* (pp.430-436 : 浪花宣明『分別論註』平樂
 寺書店, 2004年, p.721-727), *Sārasāṅgaha* (pp.27-38 : 浪花宣明『サーラサンガハの研
 究』平樂寺書店, 1998年, pp.72-91), *Dīghanikāya-aṭṭhakathā* (DN-A.) (vol.III, p.897-
 903) = DN.28 'SampasādanIya-s.' の註 (片山一良『長部大篇 I』大藏出版, 2005年,
 pp.461-464, 補注28-29), *Majjhimanikāya-aṭṭhakathā* (MN-A.) (vol.IV, p.114-121) =
 MN.115 'Bahudhātuka-s.' の註 (片山一良『中部後分五十經篇 I』2001年, pp.456-457,
 補注13-14) の記述に近いものとして挙げられる。他には比較的簡潔な記述として DN-
 A. (vol.II, p.659) = DN.19 'Mahāgovinda-s.' の註 (片山一良『長部大篇 II』大藏出版,
 2004年, p.342補注9) がある。

ettha āṇā pavattati.

「威力國土」は一兆の輪圍山〔世界〕である。「アーターナーティヤ護呪」⁽¹²⁾、「孔雀護呪」⁽¹³⁾、「旗先護呪」⁽¹⁴⁾、「寶護呪」⁽¹⁵⁾などの威力が届く範囲である。

※いわゆるパリッタが効力を發揮する範囲を言うのであろう。

2-2-4 visayakhattassa pana parimāṇaṃ n’atthi. buddhānañ hi “yāvatakaṃ nāṇaṃ tāvatakaṃ ñeyyaṃ, yāvatakaṃ ñeyyaṃ tāvatakaṃ nāṇaṃ, nāṇapariyantikaṃ ñeyyaṃ, ñeyyapariyantikaṃ nāṇaṃ” ti vacanato avisayo nāma n’atthi.

「對境國土」には限界はない。なぜなら「諸佛にとっては知の範囲が所知の範囲であり、所知の範囲が知の範囲である」と〔*Cūlaniddesa* (vol.I, pp.178-179; vol.II, pp.357-358) ; *Paṭisambhidāmagga* (vol.II, p.195) に〕あるから。

2-2-5 imesu pana tīsu khettesu ṭhapetvā imaṃ cakkavālaṃ aññaṃsīm cakkavāle buddhā uppajantī ti suttaṃ n’atthi, na uppajantī ti pana atthi. tīṇi hi piṭakāni-vinayaṭṭakāṃ, suttantaṭṭakāṃ, abhidhammaṭṭakāṃ. tisso saṅgītiyo-mahākassapaṭṭherassa saṅgīti, yasatṭherassa saṅgīti, moggaliputtatṭherassa saṅgīti. imā tisso saṅgītiyo āruḥhe tepiṭake buddhavacane imaṃ cakkavālaṃ muñcivā aññaṃttha buddhā uppajantī ti suttaṃ n’atthi, na uppajantī ti pana atthi.

これらの3つの國土において、この輪圍山〔世界〕を除いて他の輪圍山〔世界〕に諸佛は生じると説く經はない。生じないと説く經はある。なぜなら三藏（律藏・經藏・論藏）、三回の結集（大迦葉の第一結集・ヤサ長老の第二結集・モッガリプッタ＝ティッサの第三結集）があり、これらの三回の結集にのぼった三藏中の佛語に、この輪圍山世界を離れて餘所に諸佛が生じるといふ經はない。生じないといふ經はある。

※ここが重要な箇所である。「3つの國土において」とあることから、

(12) *DN.32*

(13) *Jātaka* 159

(14) *Samyutta-nikāya* (以下 *SN.*) 11-1-3 (vol.I, p.218)

(15) *Suttanipāta* vv.222-238, pp.39-42

限界はないとされる上の「對境國土」が含まれる。つまり限界のない世界の中で、この我々の住む一輪圍山世界以外に、佛が出現する輪圍山世界は存在しないということになり、「一切世界一佛」を説くことになる。⁽¹⁶⁾

また「佛は生じると説く經はない。生じないと説く經はある」、「餘所に諸佛が生じるといふ經はない。生じないと説く經はある」といふ文言に見られる「生じないと説く經」であるが、これは本論1-2-0に見たDN.28 ‘Sampasādanīya-s.’ (vol.III, p.114) のことを指しているらしい。⁽¹⁷⁾

2-2-6 *apubbaṃ acariman ti apure apacchā, ekato na uppajjanti. pure vā pacchā vā uppajjanti ti vuttaṃ hoti. tattha bodhipallaṅke “bodhiṃ appatvā na uṭṭhahissāmī” ti nisinnakālato paṭṭhāya yāva mātukucchismiṃ paṭisandhiggahaṇaṃ, tāva pubbe ti na vedittabbaṃ. bodhisattassa hi paṭisandhikkhaṇe dasasahassacakkaṇālakampanen’ eva khettapariggaho kato, etth’ antare aññassa buddhassa uppatti nivāritā va hoti. parinibbānato paṭṭhāya yāva sā sapamattā pi dhātu tiṭṭhati, tāva pacchā ti na vedittabbaṃ. dhātūsu hi ṭhitāsu buddhā ṭhitā va honti. tasmā etth’ antare aññassa buddhassa uppatti nivāritā va hoti. dhātuparinibbāne pana jāte aññassa buddhassa uppatti na nivāritā.⁽¹⁸⁾*

「前でもなく後ろでもなく」とは前でも後ろでもなく、同時に生じないという意味である。前か後かのどちらかに生じると言われている。そこで菩提の座において「菩提を得ずには立つまい」と坐った時以降、母胎に結生したときまでを「先」と考えるべきではない。なぜなら菩薩の結生の刹那に一萬輪圍山〔世界〕の震動によって國土の取得がなされ、ここに、この間、他の佛の出現が遮られる。般涅槃以降芥子ほどでも遺

(16) DN-A. (vol.II, p.659) 等の記述はもう少し意味が明瞭である。ettakañ hi jātikhettaṃ nāma. tatrāpi ṭhapetvā imasmiṃ cakkavāle jambudīpassa majjhimesaṃ na aññatra buddhā uppajjanti jātikhettaṃ pana paraṃ buddhānaṃ uppattiṭṭhānaṃ eva na paññāyati. 「なぜならばこれだけが「生誕國土」であり、ここでも、この一輪圍世界のジャンプ州の中部地方を除いて、他處に諸佛は出現しない。「生誕國土」の外に佛の出現は知られない」。

(17) 浪花宣明『分別論註』平樂寺書店、2004年、p.757参照。

(18) 浪花宣明『サーラサンガハ』平樂寺書店、1998年、p.73。

(42)

骨があるうちは「後」と考えるべきではない。なぜなら遺骨がある間は佛がいるのであるから。それゆえその間は他の佛の出現が遮られる。遺骨の般涅槃が起こった時、他の佛の出現は遮られない⁽¹⁹⁾。

2 - 2 - 7 kasmā pana apubbaṃ acarimaṃ na uppajjantī ti? anacchariyattā. buddhā hi acchariyamanussā. yathāha - “*ekapuggalo, bhikkhave, loke uppajjamāno uppajjati acchariyamanusso. katamo ekapuggalo? tathāgato araham sammāsambuddho*” ti. yadi ca dve vā cattāro vā aṭṭha vā soḷasa vā ekato uppajjeyyūṃ, anacchariyā bhaveyyūṃ. ekasmiñ hi vihāre dvinnaṃ cetiyānam pi lābhasakkāro uḷārā na honti, bhikkhū pi bahutāya anacchariyā jātā, evaṃ buddhā pi bhaveyyūṃ. tasmā na uppajjanti.

なぜ先でも後でもなく、同時に生じることがないのか。——希有でなくなるからである。なぜなら諸佛は希有な人である。「諸比丘よ、1人の人が世に生まれれば、それは希有な人が生まれるのである。いずれの一人か。如來・應供・正等覺者である」(AN.1-13-3, vol.I, p.22)と言われるように。もしも2人、4人、8人16人が同時に生じようものなら、希有ではなくなってしまう。1つの精舎にふたつのチェーティヤがあったら尊敬は大きくなくなる。諸比丘も人数が多いと希有でなくなる。佛が複数である時も同様である。それゆえ〔諸佛は〕生じない。

2 - 2 - 8 desanāya ca visesābhāvato. yañ hi satipaṭṭhānādikaṃ dhammaṃ eko deseti, aññena uppajjitvā pi so va dhammo desetabbo siyā. tato anacchariyo siyā. ekasmiṃ pana dhammaṃ desente desanā pi acchariyā va hoti.

それから説法が殊勝でなくなるから。なぜなら一人が説く念住などの法を、他のブツが生じても全く同じ法を説くであろう。それゆえ希有でなくなるであろう。1人が法を説けば、説示もかならず希有である。

2 - 2 - 9 vivādabhāvato ca. bahUsu ca buddhesu uppannesu bahUnaṃ ācariyānaṃ antevāsikā viya “*amhākaṃ buddho pāsādikō, amhākaṃ buddho madhurassaro lābhī puññavā*” ti vivadeyyūṃ, tasmā pi evaṃ na uppajjanti.

(19) 本論注(11)に挙げた他の註釋ではこの後に「三種の隱沒」(tīṇi parinibbānāni)の記事が割り込んでいる。

論争が生じるからである。多佛が生じれば、たくさんの先生とたくさんの内弟子のように、我々の佛は聲が美しい、利得がある、徳がある、と論争するであろう。これも諸佛が生じない理由である。

2 - 2 - 10 *apic' etaṃ kāraṇaṃ milindaraññā puṭṭhena nāgasenattherena vitthāritam eva. vuttañ hi tattha (mi. pa.5.1.1) -*

更にこの理由をミリンダ王に問われたナーガセーナ長老が詳説している。そこには次のように説かれている。

(中略 ここには *Milindapañho*, pp.236-239が引用されている。内容は本論 2 - 1 を参照。)

2 - 2 - 11 *ekissā lokadhātuyā ti ekasmiṃ cakkavāle. heṭṭhā iminā va padena dasa cakkavālasahassāni gahitāni, tāni pi ekacakkavālen' eva paricchinditūṃ vaṭṭanti. buddhā hi uppajjamānā imasmiṃ yeva cakkavāle uppajjanti, uppajjanatṭhāne pana vārite ito aññesu cakkavālesu na uppajjantū ti vāritam eva hoti.*

(一世界一轉輪王に關して)「一つの世界に」とは一つの輪圍山にである。上ではこの言葉で一萬の輪圍山が意味されたが、一萬の輪圍山も一つの輪圍山によって限定されるべきである。なぜなら諸佛は生じる時にこの輪圍山だけに生じるからである。生じることが遮られているため、ここより他の輪圍山には生じない。

※ここは「一世界一轉輪王」を説く文脈における「一世界」の範圍を註釋する。轉輪王の場合は、一萬輪圍山世界ではなく、一輪圍山世界として理解せよという。後に見るようにこの理解は説一切有部と共通している。

3 . 説一切有部の見解

3 - 0 説一切有部の見解を世親の『阿毘達磨俱舍論』によって以下に検討する。⁽²⁰⁾和譯はサンスクリット原文にもとづくが、比較のため大正藏の漢譯も併記した。上と同様に※は筆者によるコメントである。

(20) 衆賢『阿毘達磨順正理論』(T29, pp.524b-525c) および『阿毘達磨藏頭宗論』(T29, pp.857c-858a) に同様の議論がある。

(44)

3 - 1 ⁽²¹⁾ sūtra uktam—“*asthānam anavakāśo yad apūrvācaramau dvau tathāgatāv arhantau samyaksambuddhau loka utpadyeyātām/ nedam sthānam vidyate/ sthānam etad vidyate yad ekas tathāgata h/ yathā tathāgata evam cakravartinau*”—iti/

『俱舍論』(T29, pp.64c-65a)：故契經言。無處無位非前非後有二如來應正等覺出現於世。有處有位唯一如來。如說如來輪王亦爾

經に言われる。「これは理にかなわず、その餘地がない。先でも後でもなく〔同時に〕二人の如來＝阿羅漢＝正等覺者が世に生じること、この道理はない。一人の如來が〔世に生じること〕、この道理はある。二人の轉輪王も如來におけると同様である」と。

3 - 2 idam atra sampradhāryam—kim atra trisāhasramahāsā hasro lokadhātur loka iṣṭaḥ, utāho sarvalokadhātava iti/

應審思擇。此唯一言為據一三千。為約一切界。

ここで以下のことが熟考されるべきである。ここで「世」とは〔一つの〕三千大千世界が意圖されているのか、それとも、一切の諸世界が意圖されているのか。

3 - 3 nānyatra buddhā utpadyante ity eke/ kiṃ kāraṇam? mā bhūd bhagavataḥ śaktivyāghāta iti/ eka eva hi bhagavān sarvatra śaktaḥ/ yatra buddha eko na śaktaḥ syād vineyān vinetuṃ, tatrānyo 'pi na śakta iti/

有説。餘界定無佛生。所以者何。勿薄伽梵功能有礙，唯一世尊普於十方能教化故。若有一處一佛於中無教化能。餘亦應爾。

「諸佛は他處には生れない」とある人々〔は言う〕。理由は何か。世尊には功能の障礙がないからであると。なぜなら、世尊は一人だけで一切處において〔導かれるべき者らを導くことが〕できるから。あるところで佛が一人で導かれるべき者らを導くことができないならば、そこでは他の佛もできないであろう。

※『俱舍論』は、一世界は一つの三千大千世界か、それとも一切世界かという問いをたて、「他の世界に決して佛は生じない」という「有

(21) 以下テキストは Dwārikādās Śāstri, Swāmī (ed.), *Abhidharmakośa & Bhāṣya of Ācārya Vasubandhu with Sphuṭārthā Commentary of Ācārya Yaśomitra*, Varanasi: Bauddha Bharati, 1987, pp.550-552による。

(eke) 説」と、他の世界にも別に佛が出現すると主張する「有餘部師 (nikāyāntarīyāḥ) 説」を擧げる。

この議論において一世界を一切世界と見る側は、「十方一佛」を説くことになる。これが有部説であろうが、以下に見るようにその論法は、上に見た南方上座部のアッタカターに見られた論法とほとんど一致する。一世界を一つの三千大千世界と見るのが、他の三千大千世界に佛が生まれると説く「十方多佛説」になるが、これは Yaśomitra によれば大衆部等の説である。

注目すべき点として、『順正理論』(T29, p.524c) では「十方一佛」側の根據として『俱舍論』にはない「應説一切界。無差別言故。謂無經説。唯此世間。又無經言唯一世界。」という文言が最初に述べられており、これを先に 2 - 2 - 5 で見た「これらの 3 つの國土において、この輪圍山〔世界〕を除いて他の輪圍山〔世界〕に諸佛は生じると説く經はない。生じないと説く經はある。」という文言と比較すると、實は似ているようで大きく内容が異なる。これについては後述する。

3 - 4 uktam ca sūtre —“sacet tvāṃ śāriṣṭra kaścīd upasamkramyaivam prcchet—‘asti kaścīd etarhi śramaṇo vā brāhmaṇo vā samasamaḥ śramaṇena gautamena yad utābhisambodhāya/ evaṃ ca prṣṭaḥ kim vyākuryāḥ?’ ‘sacen māṃ bhadanta kaścīd upasamkramyaivam prcchet, tasyāhaṃ prṣṭa evaṃ vyākuryāṃ —nāsti kaścīd etarhi śramaṇo vā brāhmaṇo vā samasamo bhagavatā yad utābhisambodhāya/ tat kasya hetoḥ? samṃukhaṃ me bhagavato ’ntikāc śrutam, sammukhaṃ udgr̥hītaṃ—asthānam anavakāśo yad apūrvācaramau tathāgatau loka utpadyeyātāṃ nedam sthānam vidyate’”—iti/

又世尊告舍利子言。設復有人來至汝所。問言頗有梵志沙門。正於今時與喬答摩氏平等平等得無上覺耶。汝得彼問當云何答。時舍利子白世尊言。我得彼問當如是答。今時無有梵志沙門得無上菩提與我世尊等。所以然者。我從世尊親聞親持。無處無位非前非後有二如來應正等覺出現於世。有處有位唯一如來。

(22) 底本は upasamkramyevam となっているが、本文のように訂正して解した。

經に説かれる。(釋尊が問う)「舍利弗よ、もし汝に誰かが近づいて次のように尋ねるとしよう。『今、沙門かバラモンにして誰か、沙門ガウタマと現等覺に關して全く等しい者がいるであろうか』と。このように尋ねられたらどのように答えを與えるか」。 (舍利弗が答える)「尊者よ、もし誰かが私に近づいてそのように尋ねましたら、彼に、尋ねられた私は次のように答えを與えるでしょう。『今、沙門かバラモンにして、沙門ガウタマと現等覺に關して全く等しい者は誰もいない』と。それは何故かと言え、私は世尊から親しく直に聞き、直に受けたからです。『これは理にかなわず、その餘地がない。先でも後でもなく〔同時に〕二人の如來が世に生じること、この道理はない』と。

※十方一佛説の根據としては、やはり本論 1 - 2 - 0 に紹介した DN. 28 ‘Sampasādanīya-s.’ (vol.III p.099) と同様のものが用いられている。

3 - 5 yat tarhi bhagavatoktaṃ brahmasūtre — “yāvata trisāhasramahāsāhasrako loko vaṣe me ‘tra vartate” — iti? ābhiprāyika eṣa nirdeśaḥ/

ko ‘trābhiprāyaḥ? tāvato ‘nabhisam skāreṇa a vyavalokanāt/ abhisamskāreṇa tv ananto buddhānāṃ cakṣur-viṣayaḥ/

若爾何緣梵王經説。我今於此三千大千諸世界中，得自在轉。彼有密意。密意者何。謂若世尊不起加行。唯能觀此三千大千。若時世尊發起加行。無邊世界皆佛眼境。天耳通等例此應知。

世尊は「梵經」(Brahmasūtra)⁽²³⁾において説かれた。「三千大千までの世界は、ここの私の支配下にある」と。この所説は密意を有する。

(23) 西義雄譯『國譯一切經 毘曇部二十六上』(大東出版, 1935年, pp.180-181)の脚注には典據として『中阿含經』「梵天請佛經」(T1, p.548a)の「世尊告曰。梵天, 如日自在, 明照諸方, 是為千世界, 於千世界中。我得自在, 亦知彼彼處。無有晝夜。」が擧げられている。これに對應するパーリは MN.49 ‘Brahmanimantānika-s’ (vol.I, p.328) の “yāvata candīmasūriyā pariḥaranti disā bhanti viroca (mā) nā; tāva saḥassadhā loko, ettha te vattate vasa” 「月と太陽とが周回し, 四方が光り輝く限り, その限りが千世界である。ここに汝 (パカ梵天) の力が及ぶ。」であるが, ここにはこの範圍で梵天と同じく釋尊も自在であるということが明言されていない。パーリにおいて釋尊の力が三千大千世界に及ぶことを明示するものとしては AN.3-8-81 (vol.I, p.228) の “ākaṅkhamāno, ānanda, tathāgato tisahassimahāsahassilokadhātum sareṇa viññāpeyya, yāvata pana ākaṅkheyya” 「阿難よ, 望むならば, 如來は三千大千世界に聲を響き渡らせることができよう。望む限りの範圍に。」が擧げられる。

ここで密意とは何か。〔普段〕特に意圖しなければそれだけ（一つの三千大千世界）の範囲を見るだけであるが、しかしその気になれば諸佛の眼の對境は無限である。

※これは2-2-4の「對境國土」を用いた南方上座部の論法と全く同じである。

3-6 santy evānyalokadhātuṣu buddhā iti nikāyāntariyāḥ/ kiṃ kāraṇam? bahavo hi samaṃ sambhāreṣu pravartamānā dṛśyante/ na caikatra bahūnāṃ yugapad yoga utpattum, na cāsti tadutpattau kaścit pratibandha iti niyataṃ lokadhātṷ-antareṣūtpadyante/ anantā lokadhātava iti na śakyam bhagavatā kalpam apy āyur bibhratā yatheha tathānyeṣv api ananteṣu lokadhātuṣu vyāpartum, kiṃ punaḥ puruṣāyuṣam/

有餘部師說。餘世界亦別有佛出現世間。所以者何。有多菩薩。現(p.65a)俱修習菩提資糧。一界一時可無多佛，多界多佛何理能遮。故無邊界中有無邊佛現。若唯一佛設住一劫時，尚不遍為一世界佛事。況同人壽能益無邊。

他部派（Yaśomitraによれば‘mahāsāṅghikaprabhṛtayaḥ’〔大衆部など〕）は「他の世界に諸佛がいる」と〔主張する〕。理由は何か。なぜなら大勢が一緒に菩提資糧を修習しているからである。そして一ヶ所において大勢〔の佛〕が同時に生じるのが適當でないのであれば、その生起に如何なる障蔽もないように、確實に他の世界において〔諸佛が〕生じる。〔しかも〕諸世界は無限であるので、たとひ世尊が一劫の壽命を保つても、ここでも同様に、他の無限の諸世界においても、仕事にならない。人壽を〔保つだけなら〕言うまでもなく〔仕事にならない。だから佛は複数いなければならない〕。

3-7 katham ceha buddho vyāpriyate? asya pudgalasyedam indriyam iyatā kālenāmuṣmin deṣe amuṃ pudgalam āgamyāsya do ṣasya parihārād asyāṅgasyopasamhārād anena prayogeṇānutpannam votpatsyate, aparipūrṇam vā paripūrayiṣyatīti/

然諸有情居無邊界。時處根性差別無邊。佛應遍觀此有情類。如是時處

(24) 底本は yoga. 訂正して解した。

應見世尊。佛便應機現通說法。令其過失未生不生。諸有已生能令斷滅。令其功德未生得生。諸有已生能令圓滿。如何一佛此事頓成。是故同時定有多佛。

どのように佛はここで仕事をするのか。このブドガラにはこの機根がある、これだけの時間をかけて、この地方において、この人に關して、彼の缺點を除去することで、彼に利點 (aṅga) を與えることで、この手段を用いて、彼に未だ生じていないものが生じるであろう、または、未だ満たされていないものが満たされるであろうと。

3 - 8 yat tv idaṃ sūtram atropanītam—“*asthānam anavakāśo yad apūrvācaramau dvau tathāgatāv ekatra loka utpadyeyātām*” iti, tad evedaṃ sampradhāryate—kim idaṃ ekaṃ lokadhātum adhikr⁽²⁵⁾ tyoktam, āho svit sarvān iti? cakravartino 'pi cānyalokadhātau na syād utpādaḥ, sahotpattiḥpratiṣedhāt buddhavat/

然彼所引。無處無位非前非後，有二如來出於世等。應共思擇。此言為說一界多界。若說多界，則轉輪王，餘世界中，亦應非有。以說如佛遮俱生故。

(十方一佛側が多佛側に對して) しからばここで先に引かれた「これは理にかなわず、その餘地がない。先でも後でもなく〔同時に〕二人の如來が一つの世に生じること〔、この道理はない〕」という經について熟考しなければならない。これは一世界に關して言われているのか、それとも、一切世界について言われているのかと。〔一切世界に關して言われているとするならば〕佛と同様に俱生が否定されているので、轉輪王にも他の世界における出現がないことになってしまう。

※ここで十方一佛側は轉輪王については他の世界に生じるとい見解を有していることが判明する。これも先に 2 - 2 - 11 で見た南方上座部の見解と一致する。

3 - 9 athaitat kṣamyate, idaṃ tu kasmān na kṣamyate—“*punyas tu buddhānām loka utpādaḥ*” —iti? yadi bahūnām bahuṣu syāt, na doṣaḥ syāt/ bhūyasām lokānām abhyudayena yogaḥ syān niḥśreyasena ca//

(25) 底本は cāsya lokadhātau. 訂正して解した。

若許輪王餘界別有，如何不許別界佛耶。佛出世間具吉祥福。多界多佛何過而遮。謂多界中諸佛俱現。便能饒益無量有情令得增上生及決定勝道。

(十方多佛側が一佛側に對して) それでは、これ(轉輪王の俱生)は許容されるのに、どうして「諸佛の世における出現はめでたいことだ」というこのことは許容されないのか。もし多く〔の佛〕が多く〔の世界〕にあれば、過失はなく、より多くの諸世界に繁榮と至福の利得があるであろう。

※十方多佛側の主張の動機は本論 1 - 1 - 0 の DN.19 'Mahāgovinda-s.' に見られる諸天のものと同様である。

3 - 10 athaikasminn api kasmād dvau tathāgatau na sahotpadyete?

1 . prayojanābhāvāt/ 2 . praṇidhānavaśāc ca/ evaṃ hi bodhisattvāḥ praṇidhānaṃ kurvanti— 'aho batāham andhe loka 'pariṇāyake buddho loka utpadyeyam anāthānāṃ nāthaḥ' —iti/ 3 . ādarārtham/ 4 . abhitvaraṇārtham ca/ ekasmin hi buddhe sutarāṃ ādriyante/ 'durlabha idṛśo 'nyaḥ' —iti manyamānāḥ sutarāṃ cābhitvarante śāsanapratipattau— 'mā 'smin gate parinirvṛte vā 'nāthā bhūma' —iti//

若爾何故一世界中無二如來?時出現。以無用故。謂一界中一佛足能饒益一切。又願力故。謂諸如來為菩薩時先發誓願。願我當在無救無依盲闇界中成等正覺。利益安樂一切有情。為救為依為眼為導。又令敬重故。謂一界中唯有一如來便深敬重。又令速行故。謂令如是知一切智尊甚為難遇。彼所立教應速修行。勿般涅槃。或往餘處。便令我等無救無依。故一界中無二佛現。

(十方一佛側が多佛側に對して) それでは、〔他の世界に諸佛が出現することを認めるとして〕何故一〔世界〕には二人の如來が俱生しないのか。

(十方多佛側が答える) ①必要でないから。②誓願による。次のように諸菩薩は誓願を立てる。「ああ、私は導く者のいない盲闇の世界に、佛として世に生じよう。寄る邊のない人の寄る邊になろう」と。③尊敬

(26) 底本は abhitvarārtham. 訂正して解した。

(50)

のためと④速やかさのためである。佛が一人であれば、〔人々は〕大いに敬うし、「このような人は他に得難い」と考えて、「この御方が去るか般涅槃してしまった時に、我々が寄る邊のない者にならないように」と〔考えて〕大急ぎで教説を會得する。

4. 大衆部の見解

4-0 大衆部は十方多佛を説くということであるが、このことは大衆部の説出世部の文献である *Mahāvastu* に他方佛が言及されていることで確認できる。

4-1 これは十地の第六地を説く箇所である (*Mahāvastu*, vol.I, pp.121-124)。⁽²⁷⁾

tataḥ sthaviṛaḥ kātyāyanaḥ mahākāśyapaḥ athābravīt/
śrūyatāṃ lokanāthānāṃ kṣetraṃ tatvārthanīśritaṃ//

それから、長老迦旃延は大迦葉に言った。「世の導師(佛)たちの、眞實義に依る國土について聞きなさい。

upakṣetraṃ ca vakṣyāmi teṣāṃ paramavādināṃ/
tāni nīsamya vākyāni śāsanāṃ ca naravara//

かの眞實説者(佛)たちの upakṣetra⁽²⁸⁾ について私は説こう。最上人よ、言葉と教えを聞きなさい。

ekaṣaṣṭiṃ trisahasrāṇi buddhakṣetraṃ pariḥkṣitam/
ato caturguṇaṃ jñeyam upakṣetraṃ tathāvidhaṃ//

三千の61倍が佛國土と認められる。その4倍が upakṣetra であると知るべし。

evam ukte āyusmāṃ mahākāśyapaḥ āyusmantāṃ mahākātyāyanam
uvāca// kiṃ punar bho jinaputra sarveṣu buddhakṣetreṣu utpadyanti
samyaksambuddhā utāho keṣucid eva utpadyanti// evam ukte
āyusmān mahākātyāyana āyusmantāṃ mahākāśyapaṃ gāthābhir
adhyabhāṣe//

(27) 平岡聡『ブツの大いなる物語(上)』pp.77-78参照。

(28) 平岡氏はこの語を「準國土」と訳されている。また注において「問題の語」とされてもいる。

このように言われて、長老大迦葉は長老大迦旃延に言った。「しかしながら、君、勝者の子よ、一切の佛國土に正等覺者は生じるのか、それとも、ある特定の〔佛國土〕にのみ生じるのか」。このように言われて、長老大迦旃延は長老大迦葉に偈で話しかけた。

kimcit eva bhavati aparīśūnyaṃ kṣetram apratimarūpadharehi/
kṣetrakoṭīnayutāni bahūni śūnyakāni puruṣappravarehi//

ある特定の國土は無比の容姿を具えた方（佛）がいる。たくさんのコーティ・ナユタの國土は、最上人（佛）がいない。

※すべての國土に佛がいるわけではないというのは理に適っている。すべての國土に佛がいたら、一生補處の菩薩はみな、ポストが空かないことには決して成佛できないことになる。先に2-0で見た *Kathāvatthu* の大衆部への批判は、一切方に佛が蔓延しているように見られることを批判しているようにも見えるが、大衆部の見解はそうではない。

durlabho hi varalakṣaṇadhārī dīrghakālasamudāgatabuddhī/
sarvadharmakuśalo atitejaḥ sarvasatvasukhatādharasatvo iti//

最上相を具える、長い時間かかって得られる覺りは、得難い。一切法に精通した太陽（佛）は、一切衆生の樂性を支える」と。

evam ukte āyuṣmān mahākāśyapa āyuṣmantam mahākātyāyanam
uvāca// khalu bho jinaputra ko hetuḥ kaḥ pratyayaḥ yaṃ ekasmim
kṣetre dvau samyaksam buddhau nopapadyanti iti// evam ukte
āyuṣmān mahākātyāyana āyuṣmantam mahākāśyapam gāthābhir
adhyabhāṣate//

このように言われて、長老大迦葉は長老大迦旃延に言った。「君、勝者の子よ、一國土に二佛が生じないのは、いったい如何なる因、如何なる縁か」と。このように言われて長老大迦旃延は長老大迦葉に偈で話しかけた。

※この問いは『俱舍論』（3-10）でも展開されていた。しかし以下の答えは、答えとしてよく理解できない。後考を待つ。

yat kāryaṃ naranāgena buddhakarma suduḥkaram/
tat sarvaṃ paripūreti eṣā buddhāna dharmatā//

人中の象（佛）によってなされる、はなはだ成し遂げ難い佛の業、そのすべてを満たすこと、これが諸佛の常法である。

asamartho yadi siyād buddhadharmeṣu cakṣumām/
tato duve mahātmānau utpadyete tathāgatau//

もしも具眼者が諸佛の常法に適合しなければ、それゆえ二人の偉大な心具える如來が生じるであろう。

taṃ cāsamarthasadbhāvaṃ varjayanti maharṣiṇām/
tasmād duve na jāyante ekakṣetre nararṣabhau//

〔人々は〕大仙たちのそのような不適合があることを拒む。それゆえ二人の人中の牡牛（佛）は一國土に生じない。

na jātu sāvaśeṣeṣu buddhadharmeṣu śruyate/
nirvṛtāḥ puruṣaśreṣṭhā atītādḥve jinātmajā//

勝者の子よ、過去世に、諸佛の常法を残しつつ般涅槃した最上人（佛）については全く聞かれない。

anāgatā atikrāntā sambuddhā ye ca sāmpratam/
kṛtena buddhadharṣeṇa nirvāyanti narottamā iti//

未來・過去の諸佛・最上人は、諸佛の常法を成し遂げてから般涅槃する。そして現在も。

evam ukte āyusmān mahākāśyapaḥ āyusmantam mahākātyā-
yanam uvāca// katamāni bho jinaputra sampratī anyāni buddhakṣ-
etrāṇi yatraitarhi samyaksambuddhā dharmam deśayantīti// evam
ukte āyusmān mahākātyāyana āyusmantam mahākāśyapam gāthā-
bhir adhyabhāṣe//

このように言われて、長老大迦葉は長老大迦旃延に言った。「君、勝者の子よ、現在そこで正等覺者が法を説いているような他の佛國土は、ちょうど今、いずれか」と。このように言われて、長老大迦旃延は長老大迦葉に偈をもって話しかけた。

purastime diśo bhāge buddhakṣetram sunirmitam/
tatra mṛgapatiskandho nāmena jinapuṅgavaḥ//

東の方面にスニルミタという佛國土があり、そこに「ムリガパティスカンダ」という名の最勝の勝者がいる。（以下略。東方の5つ、南方に3つ、西方、南方、下方、上方に1つずつの佛國土とそこにいる諸佛の名前がリストアップされる。）

4 - 2 次は *Mahāvastu* (vol.III, pp.341-342) の初轉法輪の記事であ

⁽²⁹⁾
る。

bhagavāṃ dharmacakram pravartento ekaṣaṣṭiṃ trisāhasramahā-
sāhasralokadhātūṃ bhāṣamānasvareṇābhivijñāpeti tato ca pareṇa
buddhakṣetrāṇi/ ye ca tasmīṃ samaye buddhā bhagavanto teṣāṃ
teṣāṃ ca paralokadhātuṣu pariṣadi dharmam deśenti te bhagavato
dharmacakram pravartentasya tūṣṇī abhūnsuḥ// duḥprasaho
samyaksambuddho pariṣadi dharmam deśayati/ bhagavāṃ duḥpras-
aho tūṣṇiṃ abhūsi buddhaghoṣo ca niścaraṭi/ vismitā pariṣā bhaga-
vantam duṣprasahaṃ prcchati// bhagavaṃ buddhaghoṣo niścaraṭi/
tasmīṃ niścaraṇte tūṣṇī abhūl lokanātho duṣprasaho vismitā pariṣat
.....

世尊は法輪を轉じつつ61の三千大千世界に（※これは先に一佛國土の範圍として示された範圍である）説く聲で知らしめた。それからさらに他の佛國土にも。その時、諸佛・諸世尊は各自の他世界において會衆に法を説いていた。彼らは世尊が法輪を轉じている時に沈黙した。ドゥフプラサハ正等覺者は會衆に法を説いていた。世尊ドゥフプラサハが沈黙すると、〔釋迦牟尼世尊の〕佛音が現れた。驚いた會衆は世尊ドゥシユプラサハ（ドゥフプラサハ）に訊ねた。「世尊よ、佛音が現れました。それが現れた時に世の導師ドゥフプラサハは沈黙されました。會衆は驚いています……」。

※「61の三千大千世界」が一佛國土であるとすれば、そこに聲が届くのは特に問題はないであろうが、「他の佛國土にも」聲が届くとなると、一佛の教化範圍が重なることになり、十方多佛を説く根據の一つ（本論3-6）が無意味になっている。

3. 大乘からの批判

『大智度論』(T25, p.93b) に以下の問答がある。大乘の説くところはもちろん十方多佛であるが、その論法は大衆部と比較しても特に異なるところはない。

(29) 平岡聡『ブッダの偉なる物語（下）』p.424参照。

問曰。佛口説。一世間無一時二佛出、亦不得一時二轉輪王出。以是故、不應現在有餘佛。

(十方一佛側が問う) 問うて曰く：佛、口説す。「一世界に一時に二佛出ることなし。また一時に二轉輪王出るを得ず」と。是をもつての故に、まさに現在に餘の佛有るべからず。

答曰。雖有此言、汝不解其義。佛説。一三千大千世界中、無一時二佛出。非謂。十方世界無現在佛也。

(十方多佛側が答える) 答えて曰く：此言は有るといへども、汝、其義を解さず。佛、「一三千大千世界中に一時に二佛出ることなし」と説く。「十方世界に現在佛なし」を謂うにあらざるなり。

如四天下世界中、無一時二轉輪聖王出。此大福德人、無怨敵共世故。以是故、四天下に轉輪聖王。佛亦如是。於三千大千世界中、亦無二佛出。佛及轉輪聖王、經説一種。汝何以信餘四天下、更有轉輪聖王、而不信餘三千大千世界中更有佛。

(十方多佛側がつづけて) 四天下世界中に一時に二轉輪聖王の出ることなきが如し。この大福德人(=轉輪聖王)、怨敵と世を共にすることなきが故に。これをもつての故に、四天下に一轉輪聖王あり。佛もまたかくの如し。〔一つの〕三千大千世界中においてもまた二佛の出ることなし。佛および轉輪聖王を經は一種に説く。汝、何をもつて餘の四天下に更に轉輪聖王有るを信じ、しかして餘の三千大千世界に更に佛有るを信ぜざるや。

※十方多佛側がつくのは、十方一佛側の轉輪王が他の輪圍山世界に生じることを唱えながら、佛に關してはそれを認めない不整合である。これは南方上座部については本論 2 - 2 - 11で、説一切有部については本論 3 - 8で確認できた。

復次、一佛不能得度一切衆生。若一佛能度一切衆生者、可不須餘佛。但一佛出、如諸佛法、度可度衆生已而滅。如燭盡火滅。有為法無常性空故。以是故、現在應更有餘佛。

(十方多佛側がつづけて) 復た次に、一佛にして能く一切衆生を度すことを得るあたわず。もし一佛にして能く一切衆生を度すことあたわば、餘の佛をもちいざるべし。ただ一佛のみ出でて、諸佛の法(常法)の如く、度すべき衆生を度しおわりて滅す。燭(ろうそく)尽きて火滅する

が如し。有為法は無常にして性は空なるが故に。これをもつての故に、現在まさに更に餘の佛有るべし。

※これは本論 3 - 6 に見られた十方多佛側の主張と一致する。

復次、衆生無量、苦亦無量。是故應有大心菩薩出。亦應有無量佛出世諸衆生。

復た次に、衆生無量にして苦もまた無量なり。この故にまさに大心有る菩薩出るべし。またまさに無量の佛有つて出世して諸衆生を度すべし。

問曰：如經中説：無量歳中佛時時出。譬如漚曇婆羅樹華時時一出。若十方佛充滿，佛便易出易得，不名為難値。

(十方一佛側が難詰する) 問うて曰く：經中に説く如く、無量歳中に佛は時々出る。譬えば漚曇婆羅樹の華が時々ひとつ出るが如し。もし十方に佛充滿せば、佛はすなわち出でやすく得やすく、名づけて「値難し」となさず。

答曰：不爾。為一大千世界中、佛無量歳時時出。不言一切十方世界中難。亦為罪人不知恭敬，不動精進求道，以是故，語言。佛無量歳時時一出。又此衆生衆罪報故，墮惡道中，無量劫尚不聞佛名。何況見佛。以是人故，言佛出世難。

(十方多佛側が答える) 答えて曰く：しからず。一〔三千〕大千世界中に佛は無量歳に時々出るとなす。一切十方世界中に「難し」と言わず。また罪人の恭敬を知らず、精進求道に勤めざるが為に、これをもつての故に語りて「佛は無量歳に時々ひとり出る」と言う。またこの衆生は衆罪報故に惡道中に墮し無量劫になお佛名を聞かず。何ぞ況や佛にまみえるや。これをもつての故に佛の出世を難しと言う。(以下略)

おわりに

以上、聖典中の定型句の吟味からはじめて、南方上座部と説一切有部の主張する多世界一佛説、大衆部と大乘の説く多世界多佛説の一世界一佛の原則をめぐる双方の主張を概観した。南方上座部と説一切有部が根據と論法を共有していることが確認できた。

争點の中心は、一世界一佛の原則を説く聖典の定型句中の「一世界において」の範圍をどう解釋するかにある。多世界一佛側は特に DN.28

の舍利弗の言う「現在、他の佛はいない」という文言を根據に、一切世界に他の佛はいないという意味に解する。多世界多佛側はこれを一つの三千大千世界に限るのである。

さて、「はじめに」で述べた『一世界一佛』は、字義どおりに考えれば、同時に『多世界多佛』を含意しているようにも解される」という筆者の疑問であるが、これは実はパーリ聖典の定型句に起因する。「一世界において」(ekissā lokadhātuyā)として「一」(eka)を強調するのが、多世界一佛を説く南方上座部の聖典のみであることは奇妙に思える。定型句の漢譯には「一世」などとするものは皆無であり、サンスクリット資料でも説一切有部の『俱舍論』(本論3-1参照。‘loka’となっているのはいうまでもなく連聲規則により loke が loka となったものである)も説出世部の *Mahāvastu* (本論1-1-1参照)も ‘loke’ として loka の単數・處格を用いるだけである。またパーリ聖典のみが loka (世)ではなく ‘lokadhātu’ (世界)を用いることも注意すべきであろう。これをどのように考えるべきであろうか。

証明はできないものの、恐らくは *Mahāvastu* や『俱舍論』のように漠然と「世において (loka の単數・處格) 同時に二佛は生じない」という表現が本來であろう。単數形が用いられているとはいえ、ここには「一萬世界」や「三千大千世界」といった觀念が明確に意識される以前の、他世界が明確に意識されるようになる以前の、「同時に生じない」という表現から過去佛・未來佛の觀念はすでにあつた時代の)素朴さを想定することが許されるのではないであろうか。この表現を、南方上座部の「一世界において」(ekissā lokadhātuyā)という表現と比較する時にその感が強められる。

以上の想定を支持する資料としてもうひとつ挙げるならば、先に3-3の※で少し觸れた『順正理論』(T29, p.524c)の記述がある。「十方一佛」側の根據として述べられる「應に一切界を説くべし。差別の言なきが故に。謂く『唯此世間』と説く經なし。また『唯一世界』と言う經なし」(應説一切界。無差別言故。謂無經説。唯此世間。又無經言唯一世界)という記述は、「この世界において」、「ただ一つの世界において」といった限定がないのだから、一切世界において同時に二佛は生じない」と解すべきだと主張しているのであるが、「唯一世界」が南方上座部の言

う「一世界」と同じであると見れば、「一」が少なくとも有部の聖典になかったこと、そして‘loke’が単数形であることは重要ではないことを明かしている。南方上座部は「一世界において」を採用してしまったがために、この論據は使えない。そこで本論 2 - 2 - 5 で見た「これらの3つの國土において、この輪圍山〔世界〕を除いて他の輪圍山〔世界〕に諸佛は生じると説く經はない。生じないと説く經はある。」とするのであるが、この根據が *DN.28* であるとする、*DN.28* は「現在、他の佛はいない」と述べながら、「一世界一佛」の定型句をも説くため (1 - 2 - 0 の⁽⁹⁾)、整合性を缺くように思われる。*DN.28* の文脈には「一世界において」ではなく、「世において」が相應しいであろう。改變の痕跡とも思われる。

しかしながら多世界多佛側が採用すればかえって好都合とも思われる表現が、どうして多世界一佛説を唱える側の聖典に採用されているのか。あえて「一世界において」という表現を採用した南方上座部にも、多世界多佛の見解が主流であった時代を想定すべきではなからうか。

また多世界一佛側の用いる論法が、多世界の存在を前提とすることは重要である。他の世界が意識されるようになった時に、その世界に佛はいるかないかという点で見解が分かれたと考えられ、論理的に見て多世界一佛説は、必ずしも大衆部と大乘の唱える多世界多佛説に先行するものではない。

今後の課題として残されているのは、南方上座部のいう「一萬輪圍山世界」と「三千大千世界」の関係を明らかにすることや、大衆部の説く「三千の六十一倍の世界」と「その四倍のウパクシェートラ」を明らかにすることなどである。また「一世界に同時に二佛は生じない」という場合の、「同時」の意味内容の理解が、南方上座部と説一切有部とで異なっている可能性を吟味する必要もある。こういったことどもについて別稿を起こす予定である。

(9) *Apadāna* の冒頭の *Buddha-apadāna* にはあるいはその痕跡が見られるのかもしれない。勝本華蓮「諸佛と辟支佛—*Apadāna* を中心に」(前掲論文) 参照。